

20-3 ウエペケレ「チナナサパ」解説

語り手：木村きみ
聞き手・解説：萱野茂

萱野：わたくしは二人兄弟で、何不自由なく仲良く生活をしておったアイヌでございました。何不自由なく生活をしておった二人兄弟でありました。父の友達が、**uymam** [交易] と言ってこう、山の方へ行ったりいや……海の方に行つて、いろいろな宝物を交換して帰るとか、行きながらよく寄つて休む人だった。

ある時に、まだその父の友人が寄つて、たくさんの宝物を置いて、「自分は子供がなくて、子供欲しいので、あんたの息子一人、頼むから養子に出来ないか」とそう言つて、どっさり宝物を置いていった。父は日頃仲良しをしておった人からの申し入れなので断り切れずに、自分の一番仲良しの弟をやることにした。弟を連れて送つて行つて、どっさり酒をつくり、そして、村中の人達を呼んで、弟がこの村の仲間入りをするから、どうぞよろしくとゆうふうにして置いて帰つてきたと。

そして、何か月か経つたある日、**kimun** と言って、山へ猟に行つて、そしてこれいま喋つているのは兄なんですが、山へ行つて、**kucacise** という狩小屋に行つていると、そしてまあ、ちょっとした月明かり、星明りのときなので、外へ出て便所へ行つておつた。そうすると向こうのほうから何かその、目には見えないけれども飛んできて、そして声を出して言うのには、

木村：声だすより、**cinana sapa motot otura(?) hine puyar kari ahun h_inen an h_inen...** [ホッチャリの頭が背骨をつけて (?) 窓から入つて来ていて…]

萱野：あーなるほど。

木村：**omotone(?) cinana sapa** [もとになつている (?) ホッチャリの頭]

萱野：ちゃんと座つて言つてくれてかまわないよ。いいからなんでもないので、そのまま座つて。

木村：cinana sapa konto inaw a=kore wa a=hopunire, an kuskeraypo
i=koasurani a=akihi a=siknure p ne kus [ホッチャリの頭にイナウを
あげて神の国へ送った。そのおかげで危急の知らせをもらい、弟を私が
生き返らせたから] って。

萱野：あーなるほどなるほど。cinana ちゅったらなんだこれは。

木村：秋味の motot [鮭の背骨]、sapaha [頭]、ホッチャリの sapaha [頭]。

萱野：あーなるほどね、それがどう言う訳でそういうふうにしてまた

木村：asurkor [知らせをもって] してさ。

萱野：あーなるほどね

木村：kamuy [神] だから。

萱野：その何やらが飛んで来て言うのには、「お前がいま急いで行かないとそ
の弟が死んでしまうよ。」と、そのように言ったので、もう外へ出て、
便所におったんだけど、飛び出して、すぐに猟の生活であるだけに、す
ぐまかないほどく [着ているものを脱ぐ] という事もしていないので、
手に持った杖ぐらい手に持って、すぐにその何やら目には見えないのだ
けれども、神様か化け物かわからないけれども、そのあとついて走っ
た。

そして、弟の村へ一足飛びに飛んでみると、弟の別居するのに家を
建てたその家には、人のおる気配もなく、その隣の舅の家だけに明々
と火が灯っておると。様子を伺ってもさっぱりわかんない。黙って聞い
たら中でその話をしておる様子では、弟の、なんか不吉なことがあった
様子なので、家の中へ飛び込んで、その弟の妻であったものの髪の毛を
手に巻きつけて、「お前どうしたんだ」と聞いたら、舅じいさんが、婿
さんが来てから自分の名前がさっぱりなくて、婿さんばかりが有名にな
ったから「お前殺せ殺せ」と言うので、たったさっき夕飯に、その食べ
物に surku [トリカブト] といって毒を入れたんだと。クマ獲り用の毒
を入れた。

で、山から帰ってきてすぐにそれを食べて死んだから、そこへ引きず

って、家の隅へ置いてきたと言うんで、すぐその弟のどこへ、家のどこへ飛び込んで行って、その弟を引きずり出してみると、もう死んで、完全にみたい死んでいると。で、もう村中の人たちに、大声で呼んだので大勢の人たちが集まって来て、みな年寄り達が見たらその **ureyupupu** と言うのは、この足の指をすっかり、**ureyupupu** ったら、こう指かい？ 足の指だな。

木村：そうだ。足こうしっかり [すっかり]

萱野：足の指が、こう丸まされたような感じになっていけば、これはどうしてもその、もう生きないもんだと。けれども、この **urecyaya** と言って、足の指なんかはまだこう広がっている感じであれば、生きる見込みあると。それを見たら、これは生きる見込みがあると言うんで、村の人達みんな集まって手当をしたと。こういうところも細かく言うておるんですけれども、まあ **surku** を飲ましたというその毒、日本語ではこれはトリカブトとかオオトリカブトと言うんですが、アイヌ語でその **surku** というその **surku** の神様にも、みなが呼びかけて、助けるようにして、何とかして助かったと。

そしてそのあとは、自分の村へついて帰ってきて、村で一緒に生活をしたということで終わっておりますが、この病人の手当の仕方、いま言ったその、そういう半死状態になったものでも **ureyupupu** したものは、助かる見込みがないと。**urecayaya** と言ってこの足の指を広げているものは助かるものだと、こういうことは経験として覚えておいた方が良いでしょうと一人のその男が物語りました、というのがこの **uepeker** [散文説話] でした。

えー大変いい **uepeker** でしたよ。

木村：えへへ (笑)。

萱野：そして知らせに来てくれた神様の名前は **cinana sapa** [ホッチャリの頭] と言って、そのいわゆるホッチャリのこと **cinana** と言うんだな。

木村：ホッチャリの

萱野：秋味 [鮭]、ホッチャリ、秋味の頭が知らせてきてくれたので、その頭に **inaw** [木幣] をつけて厚くお礼を申し上げたとそうゆうことでしたね。

木村：そうです……